

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

## セ ン タ ー 通 信

第 3 号  
2009. 3. 31

## 怪事件と探偵、並行する小説と事件報道

成 田 康 昭

## 玉ノ井八つ切り殺人事件

一九三三年(昭和七年)三月七日に玉ノ井のお齒黒どぶで男性の胴体が発見され、その後つぎに死体の一部が見つかるというグロテスクで謎に満ちた事件が起きた。

「玉ノ井八つ切り事件」である。新聞各紙はこぞってこの事件をかき立てた。結局、事件そのものはこの年の四月二十八日に迷宮入りのまま捜査本部はさつさと解散されて終局してしまったのだが、この報道の中で乱歩は「探偵小説家江戸川乱歩氏」として新聞に登場している。

「事件の現場今や猟奇新名所と化す八つ切り死体集まる興味 三人寄れば噂の花」(見出し)

「犯人の奴、いま頃何してるか! それを思うと」寺島署の捜査本部では夜の目もねずに苦慮してゐる。他面

は、解せぬ謎の怪奇がいよいよ興味化されてゆく、地元玉ノ井かいわいではもう寄るとさはるとバラバラ事件の話、そして帝都の猟奇的関心は燃えさかり、

……中略……

「深慮の様で無智なやり方だ 探偵小説家江戸川乱歩氏が 描き出した 獨想」(見出し)

この興味の渦巻く中に流石は探偵小説界の大立者江戸川乱歩氏も新聞記事に基き全関心をぶち込んでゐた、十六日午後戸塚の自宅に氏は奔放獨自の想像を描いてゆく……「胴体を三つに切るなどは外国にもない例で運搬に便利と思つて小さくしたので憎しみのためではないがやり口としては利巧ではないね、被害者の始末をした点ノコギリだけを用いた点で残虐性の人のやり方である」と変態視してゆく記者「普通人ならどうするんです?」答 「被害者の始末をする前に我が

## 目 次

|                       |                            |
|-----------------------|----------------------------|
| 〈エッセイ〉                | 怪事件と探偵、並行する小説と事件報道……成田康昭 1 |
| 乱歩と地方都市モダニズム……小松史生子 2 |                            |
| 〈資料紹介〉                | 「黄色団」 解題……落合教幸 3           |
| 「黄色団 大計畫ノ巻」……4        |                            |
| 〈本の紹介〉                | 「うつし世の乱歩」「乱歩の軌跡」……11       |
| 〈編集後記〉                | ……12                       |

身を隠してしまふね、切ると考えるのは残虐性のある 切った経験のある……しかも死体が硬直すれば切り易いと知つてゐる者だ、肉屋か、前身為肉屋か……略……

一九三三年三月一七日(夕)

東京朝日新聞

もちろん、ここで潜在的に語られているのは、「明智探偵」が小説中の「バラバラ事件」を推理している構図である。新聞が、現実の乱歩の声を借りながら、現実起こった猟奇的事件を、謎と推理の構図として描いているのである。

## 探偵江戸川乱歩

このような現実の事件と自身との交差に乱歩は戸惑っていた。この年、乱歩は二度目の休筆宣言をしているが、「私としては事実を見せられるのが堪えられない」と休筆宣言の理由を語つたと新聞にかかれ、それを否定しながらも「こ

いう気持ちがあつたわけでもない」と『探偵小説四〇年』に記している。「上海丸事件」もこの時期に人口に膾炙した事件であつた。事件は一九三三年(昭和八年)八月七日に上海から神戸港に着いた持ち主のいないトランクから、バスタオルに包まれた女性の全裸死体が見つかつたという事件である。この事件も「トランク詰美人事件」として様々な推理を呼ぶ事件となつたが、同二六日に上海で犯人の兄弟が逮捕され落着した。この報道の中で、乱歩は事件報道の翌日付の新聞に推理者として登場する。

「トランクのふたは開いたが―謎はまだ解けぬ 夏の海を渡つた怪事件の打診 支人筋はかう見る」(見出し)  
真夏の海を「上海丸」が運んだ怪奇―怪しいトランクのふたは開いた。然しこの怪事件の秘密の扉は、まだ少しも開かれてゐない。日本人? 支那人? 被害者や加害者の国籍さえまだ判然とはせぬ。誰が、誰を、何のために?

…中略  
「情痴の果か江戸川乱歩氏談」（見出し）

この事件は大体情痴関係からの犯罪で犯行も計画的なものではないと思ふ、白メリヤスのズロースをはいいたのみの全裸体、頭部に巻き付けられたバスタオル、綿だけの敷き布団、桃色格子縞の布等及び傷は鈍器様のものである点又死体配置の方法として多数の証拠品と共に事実あつた殺人事件にも探偵小説にももつとも安易な素人的方法としてとられるトランクに死体をつめた点などより推して女が男の寝室で痴情のもつれから不意に起つた惨劇と僕は見る…、

八月九日 東京朝日新聞

続報を見ると、犯人が逮捕されてわかつた結果は、この乱歩の推理とほぼ一致していたようである。

### 都市空間と怪事件

犯人の不明な犯罪事件を「怪事件」と呼んで、一種の「謎」として描くという新聞記事は、実はこの昭和初年の頃に盛んに表れるようになる。しかし、これは新聞の犯罪記事の変遷の中で見ると、決して一般的なものではない。

小新聞の表現を色濃く残す明治中期の新聞記事は、まず「講談調」に犯罪を犯人の心情から語り、それを「因果応報」

や教訓という物語に回収しようとした。その豊穡で饒舌な表現世界は、近代化と合理化という不可逆な流れの中で、まもなく変容していく。まず表れるのは、殺人現場を、あたかもそこに居合わせたように、生々しく描写した、活劇調の表現であつた。ここでは、犯人の動機は推定されても、恨みや絶望といった心情への思い入れはもう見られない。

明治末年から大正期にかけて、新聞の社会面には変化が現れる。近代国家体制が急速に高度化する中で「台湾土匪」の蜂起や、獨軍に耳を切り落とされた日本人、大阪や、八幡での労働事件などが社会面を賑わせる。犯罪事件の記事は減少し、警察調書のように、意味をそぎ落とし、瘦せて形式的な犯罪報道となっていく。

### 秘密と謎解きの構図

ところが、この時期には一方で新聞読者の増大がおこっている。日露戦争前には一〇万部に満たなかつた各紙に、一〇〇万部時代が到来するのである。

冒頭で見た、「怪事件」としての犯罪報道は、このような背景の中でポピュラーなコンテンツとして復活した犯罪報道である。ここでは事件のもつ不安とサスペンスが強調され、合理と推理という理性的な視点を注ぎ込まれる。その犯罪理解の枠組みが、「秘密と謎解き」、「怪事件と探偵」なのである。

犯罪事件とは何かという問いは、社会がいかに「犯罪」というものを意味づけるかという、いわば犯罪理解の形式として考えることができる。その意味で、新聞記事という犯罪を語る枠組みの変遷は、犯罪理解の変遷でもある。そして、いまでもなく、それは、推理小説を含む文学的フィクションが犯罪を語る形式の変遷ともパラレルな関係にある。

（立教大学社会学部教授）